

## 第1章 かぶりモノ

著者	佐藤 寛
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	100
雑誌名	イエメンものづくり：モノを通してみる文化と社会
ページ	3-26
発行年	2001
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00017646">http://hdl.handle.net/2344/00017646</a>

## 第1章

---

# かぶりモノ



男の子は小学校に上がる前から頭に布を巻く習慣を身につけている子が多い。教室に椅子と机はなく地べたに座って学習している。(アルジャピンの小学校にて)

マシャツダ（ターバン）

イエメン人は、アラブ人の本流であり、最も早い時期からのイスラム教徒である。イエメン人がイスラムに改宗したのはヒジュラ歴（預言者ムハンマドがマッカからメディナに移動した年を紀元とするイスラム太陰暦）の六年（西暦六二八年）で、それ以降イエメン人は終始一貫してイスラム教徒でありつづけている。

イスラム教徒といえ、形状や素材はさまざまだが「かぶりモノ」が欠かせない。そしてイエメン山岳部のかぶりモノは頭布（あたまめ）が基本である。頭布は日本語では普通「ターバン」と呼ばれ、辞書には「イスラム教徒の男子が頭に巻く長い布」と書いてあるが、イエメンではマシャツダ スマータ シャール キシーダ などと呼ばれる。この頭布は山岳部イエメンでは男子の身繕いに不可欠な要素であり、同時におしゃれの原点でもある。

アラブの頭布で真っ先に思い浮かぶのはPLEOのアラファト議長の特レードマーク、白地に黒の格子模様の布だろう。イエメン人も格子柄を用いるが、白地に赤い格子のほうが人気がある。また同じ格子模様でも、格子目は細かいものから大きなものまでいくつかの段階があり、地の色も白ばかりではなくネズミ色、カーキ色、茶色などの地味な色のもの

もよく見かける。色つき布の場合は格子模様  
様の代わりに、周囲になんらかの縁どり模  
様が描かれている場合も多い。

イエメン人の使う頭布は、おおむねメ  
ートル四方の正方形で、それを対角線で折  
って直角二等辺三角形にし、底辺を額にあ  
てて巻きつける。伝統的には部族ごとにか  
ぶる布の色柄や、巻きつけ方が決まってい  
たらしく、マシャッタを見れば出身部族  
(イエメンには六〇〇以上の部族があるとされ  
る)がわかると言われていたようだ。かつ  
ては同一部族の人は同じような色柄のマシ  
ヤッタをかぶっていたのだろうが、現在で  
はさまざまな柄のマシャッタがスーク(市  
場)で入手できるので、必ずしもマシャッ



イスラムの祝祭日に踊る男たち。ハレの日には、とくにかぶりモノは欠かせない。(マナハにて)

ダの色柄で出身部族を特定することはできない。しかし巻き方には明らかに地方差があるので、北部山岳地出身か、砂漠地方の出身か、沿岸部の出身かといった程度は容易に判別できる。

近隣のサウジアラビアや湾岸諸国でも頭布は用いられるが、単に頭に巻きつけるのではなく、黒い輪っか イカール で無地の白い頭布 スマータ を止めるスタイルが一般的である。この場合の布はマシャツダよりもひと回り小さい。このスタイルに白いアラブ風長衣をゆったりと着た姿は日本人ビジネスマンの間では「オバQスタイル」と呼びならわされている。

しかし容易に想像がつくように頭布をイカールで止めるスタイルは、冷房の効いたオフィスでデスクワークをするには向いていても、あまり肉体労働向きではない。頭布がずれないように下にレース地の小さな帽子をかぶるのだが、それでも畑を耕そうとか口バに乗って移動しようとすればすぐずれてしまふし、屋外で風にさらされたら簡単に飛ばされてしまふ。だから農業国であるイエメンではオバQスタイルは流行らず、皆しつかりと頭に布を巻きつけているのである。

マシャッタはこのようにマシャッタは「伝統的」なから来るのかぶりモノなのだが現在スークで売られているものほとんどは輸入品である。マシャッタの材質は綿が主流であり、紅海やインド洋の沿岸地域では綿花が栽培されているイエメンでも国産は可能なはずなのだが、国産品はほとんどない。そしてよく見ると、同じような色、柄でも品質はピンからキリまである。格子模様も高級品は刺繍であるが安物はプリントで、数少ない国産品はたいていこのプリントものである。また四辺が裁ちっぱなしのものから、白い房の縁どりがなされているものまである。



スークのマシャッタ屋。さまざまな色の格子柄のマシャッタ、縁取り柄のシャルが所狭しと並んでいる。色により、柄により、そして素材によって値段の幅は大きい。(サナア旧市街にて)

マシャッタはいったどこから輸入されているのだろう。一九八〇年代前半まではスークに回る最高級品は「エレファントブランド」の日本製で、「コットン一〇〇%、刺繍柄、周囲に房つき」というものであった。格子の色は黒と赤の二種類で、当時プリントものが一枚一〇〇一五リヤル（当時の換算レートで五〇〇円程度）に対して日本製は一二〇リヤル以上していた。もともとはこれは日本から直輸入したわけではないようで、ラベルには「サウジアラビアにおける代理店・アルアーギル商会・マツカ」とあり、その下に日本の会社の名前が記され、「OSAKA, JAPAN」となっている。つまり、サウジに輸入されてそこから陸路「密輸」されてきていた可能性が高い。輸入関税がほとんどかからないサウジから密輸したほうが、直接イエメンに輸入するよりはるかに安く品物を手に入れることができるからである。

ところで興味深いのは同じ「アルアーギル商会」扱いの同一ブランドでありながら、ラベルに印刷されている日本の会社の名前がいろいろあったことである。どうやら「エレファントブランド」はアルアーギル商会のもので、ここが関西地方のいくつかの中小繊維工場に同一規格のマシャッタを委託生産させていたのではないかと思う。残念ながらこうした工場を訪ねて行ったことはないのだが、その後生産拠点は中国に移転したらしく（一九

八五年のプラザ合意による急激な円高の効果であろう)、八〇年代後半になると同じ「エレフアントブランド」の中国製が幅を利かせるようになり、日本製はほとんど姿を消した。さらに九〇年代に入るとこのブランドではないシリア製、ヨルダン製のものが最高級品としてスークに君臨するようになった。

アラブの伝統的かぶりモノなのだから初めからシリアあたりから輸入していたらよさそうなものだが、これがグローバリゼーションというものだろう。安い労働力を求めて浮遊する繊維産業の実情がマシャッタにも影響しているのだ。日本を振り出しに、中国に渡り、ようやくシリアまで高級マシャッタ生産技術が広まったというわけだ。だとすればいつの日かイエメンがマシャッタを国産できるようになる日がこないともかぎるまい。そのときまでイエメン人が、マシャッタをかぶりつづけていれば、だが。

あたま布の使い道

頭布(あたまぬの)が手放せないのは、何もまとわれないはだか頭ではなんとなく寂しいという習慣によるものでもあるだろうが、その実

用性も無視できない。

試みに頭に巻いて出かけてみれば、とりわけイエメン山岳地の気候条件にはぴったりで、これほど重宝なものはなかなかない、ということにすぐに気づくだろう。



まず第一に日除けになる。アラビアの日の陽射しを頭に直接受ければ、三〇分も経たないうちに日射病・熱射病になること請け合ひである。マシャツダは余つた布を後ろに垂らすことで後頭部まで覆うことができるので、日除けとしては完璧である。

第二に、防寒具として役にたつ。アラビアで防寒具とはやや意外に思われるかもしれないが、イエメン山岳部では標高二〇〇〇メートル以上に位置する町も少なくない。首都のサナアは二三〇〇メートルの高原盆地に位置する。盆地の常として冬などは朝晩めつきり冷えこみ、ときには水たまりに氷が張ることさえある。冬の朝、夜明けの礼拝 ファジュル のためにモスクに向かう人々や、街頭の警備に立っている軍人は皆マシャツダを顔に巻きつけ目だけを出して寒さをしのいでいる。

第三に、ほこり除けになる。乾燥している上に交通量の多いサナアでは昼間自動車が巻き上げる砂ほこりはかなりひどい。また、乾いた風がときおり上昇気流をつくって小さな竜巻を立ちのぼらせる。そんなときには頭布をすっぽり頭からかぶって砂除けにするのである。一方、紅海沿岸部や内陸部では砂漠の砂嵐に遭遇することもしばしばあり、そんなときにもこの布がなければ砂つぶてをまともに受けて痛くてたまらない。

第四に、手ぬぐいになる。ハンカチを持ち歩いているイエメン人を見たことがないのは、

手を洗ったときにはマシャツダの端で手が拭けるからだろう。もちろんその気になれば鼻もかめるし、メガネも拭ける。もっとも、日本でもネクタイでメガネを拭く人を時折見かけるから、この使用法は驚くにはあたるまい。

第五に、風呂敷代わりになる。スークでの買い物は男の仕事だが、通常イエメン人は財布が必要になる。最近でこそスークのどこの店でも薄っぺらいビニール袋に買ったものを入れてくれるが、以前はそんなものはなかったから、マシャツダは重宝したことだろう。今でも、ビニール袋に入らないような少し大きな買い物をした場合には、マシャツダを風呂敷代わりにして運搬している光景を見かける。

第六に、けがをしたときには包帯代わりになる。骨折した腕をつるすこともできる大きさである。

第七に、地方旅行に出かけてみすばらしい宿舎（仕切られた部屋があるものは フンドク、大部屋でベッドだけがあてがわれるものは ルカンダ と呼ばれる）に泊まる羽目になり、どうみてもここには南京虫がいる、と確信したときにはベッドの上にシーツ代わりに敷けば被害が少ない。この効果は実証済みである。



日常的には、頭布を頭に巻く場合と肩からかける場合が半々ぐらいであろうか。「よそ行き」度が高まるほど頭布の着用比率は高まる。(サナア旧市街にて)

第八に、濾過器として使えるかもしれない。やはり地方を旅行していて、喉が乾いているのにきれいな飲み水が見つからず、ちよつと怪しげな水たまりがあつたとしよう。この場合、マシャツダを上から静かに水面にかぶせて少し沈め、その上にたまつた水をすくえば、例えばボウフラなどは濾すことができる。ただし、これがどれほど衛生的に効果があるのかは、定かではない。さらに、マシャツダを頭にかぶらず、おしゃれアイテムとして使うことがある。三角形に二つ折りにした状態で女性のショールのように肩に掛けるのだ。このような場合この布が「シャル」と呼ばれるのはおそらく「シヨール」と語源が同じだからだ

ろつ。頭布の「シャル」としての使用は、明らかによそ行きのスタイルである。一週間のうちで最も大切な金曜正午の礼拝（イスラムの休日）は金曜日である。のためにモスクに出かける男たちが、白いアラブ風ワンピースの上に黒か紺の背広を着こみ、その上からシャルを羽織るのである。シャルの両端は胸の前で結ぶか、単に両脇にぶら下がる。後ろから見たとき、背中にこの布がきれいな逆三角形を描いているとなかなか粋な雰囲気となる。金曜日以外でもイスラムの二大祝祭である断食明けの祭と巡礼祭のときにはよく見かける。さらに役所の若い高官や、インテリ学生は日常的にもこのスタイルを好んでいる。

コウファイヤ（帽子）

乾燥して、比較的標高が高い山岳部イエメンに比べて、紅海、インド洋沿岸地域では気温と湿度が高いため、マシャッタのような大判の布を頭に巻きつけるのはあまり快適ではない。そこで、もう少し小さな頭布（あたまぬの）をはちまきのように巻きつけるか、あるいは帽子をかぶることになる。

この帽子は コウファイヤ と呼ばれ、つばのない平たい円柱形が基本である。円柱形といっても高さはせいぜい一〇センチくらいである。かぶる人の頭の大きさに合わせてあるので、すっぽりと箱をかぶったようになる。色が白くて細かな織り柄があるものが高級品とされている。これは紅海沿岸のティハマ地方などで国産されているが、手織りなので



ティハマでは多くの人がコウフィーヤを用いている。手前の売り物はナツメヤシ（デーツ）の実。（ホテイダのスーク（市場）にて）

輸入マシヤツダよりも数倍高価である。

同じ中東イスラム地域でもエジプト、トルコなどではやや先がすばまった円柱形で、てっぺんに房がついている「トルコ帽」も見受けられるが、イエメンではこの形状はほとんどない。また頭の形にびつたりしたレース地で半球形のコウフイーヤをかぶっている人もいる。これは上述の湾岸諸国の「オバQスタイル」の際に、白い布がずれないための下かぶりとして用いられるものと同様だが、これだけをかぶっているのは円柱形コウフイーヤが高くて買えないからかもしれない。

一方、ティハマ地方などの炎天下で農



ハドラマウトのとんがり帽子。黒づくめにとんがり帽子のコントラストは格好の被写体だが、よそ者の気配を感じるとすぐに身を隠したりしゃがみ込んだりするのだからシャッターチャンスは多くはない。(セイユーン近くにて)

作業をする農民は、日本の麦わら帽子の縁のある編み帽子をかぶることが多い。もちろん素材は麦わらではなく、ナツメヤシ(デーツ)の葉を編んだものであり、比較的目的が粗く風通しがよい。形状はいろいろで、頭の部分の高さもさまざまだが、全般につばはさほど大きくない。ティハマ地方では男性も女性も同じようなデーツ編み帽子をかぶって農作業をするが、東部ハドラマウト地方には女性だけがかぶる農業帽子がある。それは頭の部分が五〇センチくらいあるかなり背高のとんがり帽子で、観光写真には必ず見受けられるハドラマウト名物と言ってよい。

ハドラマウトは内陸の、平らな岩が割けてできたような幅の狭い盆地で、デーツの木が多いことで有名である。そしてまた、デーツの実がみのる五、七月にかけては気温が摂氏四〇度以上に上がるといわれ、イエメンで最も暑い場所の一つに数えられる。その灼熱のなかで農作業をするときに脳味噌がふやけないように、頭の上に広い空間をとっているのだらう。ハドラマウトの女性はかなり厳格なイスラム教徒で、畑に出るときも顔まで隠した黒づくめのベールをかぶっている。黒づくめとんがり帽子の一团が畑にしゃがみ込んで草取りなどをしていると、遠目にはこのとんがり帽子だけがうごめいているように見え、ちよつと写真を撮りたくなる光景となる。

ところで円柱形コウファイヤーは東南アジア（インドネシア、マレーシアなど）のイスラム教徒がかぶっている帽子（トピ）にも似ている。それもそのはず、東南アジアにイスラム教を伝えたのはアラブ人であり、そのアラブ人の多くはハドラマウト出身のイエメン人であつたのだ。

イマーマ　かぶりものは、単に出身部族や地域を示すだけではない。ときには「身分」を示すこともある。

もちろんイスラム教ではアッラーの前にすべての信徒は平等であり、ヒンズー教のよう

に宗教的に理由づけられた階級はない。イスラムには身分貴賤の隔てがないことは、毎年  
の巡礼月の際に、イスラム教徒の聖地マッカ（メッカ）に集う数十万人の信徒すべてが、  
国籍、人種、貧富にかかわらずみな同じ白い一枚布をまとうて同じようにカーバ神殿のま  
わりを周回する光景に象徴的に表されている。とはいえ、どんな社会にも階級的な区別は  
あるものだ。

イエメンにおける伝統的な「上流階級」は、都市部に住むイスラム法学者、カーディー、  
預言者ムハンマドの直系の子孫、サイイド、と呼ばれるイスラム知識人階級である。いず  
れもその知識、あるいは血筋によって庶民からの尊敬を集めている。「サイイド」は血筋  
の問題なので父親がサイイドであれば当然その特性は息子に世襲される。これに対して  
「カーディー」は基本的には勉強によって獲得できる資格だが、学校教育がさほど当てに  
ならないイエメンでは子供の教育程度は家庭環境で大半が決する。親がインテリならば子  
供もしかるべく育てられるので、地方都市などでは代々カーディーを生む家系があつて、  
半ば世襲化している場合もある。

いずれにせよ上流階級ともなれば、なんらかの形で庶民と差異化をはかりたい。そこで、  
最もよく見られるのは、コウフィーヤの上から色つきのマシャッダをあらかじめきつく巻





イマーマと肩掛け布はセットである。  
(サナア旧市街の大モスク脇にて)

きつけて固定し、それをすっぽりかぶる イマーマ と呼ばれるかぶりものである。形がきれいに納まっているので整然とした雰囲気をもし出す。もともとは丁寧に頭に巻いたのではないかと思うが、それでは手間がかかるのでコウフィーヤに巻きつけたのだろう。あらかじめ結んである蝶ネクタイをゴムで首に巻きつけるようなものである。おもしろい

のはてっぺんから見るとイマーマの半分だけしかマシヤツダが覆っていないことである。巻き方によって宗派や偉さが異なるのかも知れないが、私はそこまで見分けることができない。そしてこのイマーマにはしばしば香りの良い草（レイハーン・メボウキ）が差し挟まれている。この草は結婚



マシャッダに肩かけ布，杖の組合わせも老人には多い。（サナア旧市街のスークにて）

えて、なかなかおしゃれである。この肩掛け布は輸入ものの他にティハマ産のやや厚手の布（綿製で幅広のたてじまが入っている）が用いられることも多い。

若いサイドやカーディーもいるのだが、やはりこうした威厳ある衣装はある程度の齢になり、白いあごひげなどを蓄えた人がしてこそ様になる。そういった人がサナアの旧市

式のとくにも花婿がマシャッダにつける。なんらかの魔除け、あるいは聖性を示す香草なのだろう。葬式のとくにもこの草が使われる。

またイマーマをかぶっている人の正装時（イスラムの祝祭日とか、自分が裁決をする裁判の日とか）には、色つき布（赤、黄などの原色を用いた縦縞の模様が多い）を長方形に折りたたんで、肩から「ふわり」と掛けて歩くことが多い。これもまた白いワンピースに映

街を、丸くカーブさせた柄のついた木製の杖を携えながら歩いている光景はとても絵になる。

余談ながらサナア旧市街の一面には「イスラム法学書」を売っている店が数軒軒を連ねており、なぜかこれらの店には「杖」も売っている。どうやら知識と杖は切り離せないらしい。そういえば学校の先生が持つ杖もあり サミール と呼ばれている。ときに羊飼いの少年や交通警察も棒きれを持っていることがあるが、これもやはりサミールである。どうやら杖には人や家畜を「導くもの」という意味がこめられているようである。

ベレー帽 ベレ は兵隊の印である。通常われわれが目にする兵隊さんや交通警官はくたびれたベレー帽をちょこんと頭に載せている。官公庁の入り口

の外には必ず兵隊が銃を担いで番をしているし、都市では夜十時以降になると主な交差点に兵隊が出てきて車の積み荷、とくに銃器を持ち歩いていないかをチェックしている。都市間道路の州境にも簡単な検問所があつて、トラックの積み荷、バス・タクシーの乗客、武器の有無などを調べ、外国人にはパスポートや旅行許可証の提示を求めたりする。このような機会にベレー帽姿の兵隊さんが体現しているのは「国家」「権力」の存在である。しかし、この国では「国家」「権力」はいささか頼りない。そもそも人々の心のなかに

「国家」の存在感は希薄だし、国民は国家を恐れていない。また植民地経験がある他の途上国のように、軍人が「エリート」として位置づけられているわけではない。

もちろん高校卒業時の成績のみならず、強固なコネの存在が必要になるという意味でも難関である士官学校 クツリーヤトル・シオルタ に通う幹部候補生はそれなりにエリートである。彼らが週末の里帰りのときにびしっとした軍服に身を包み、短いつばつきの制帽をかぶってアタッシュケースなどを提げている姿は、エリートっぽさを感じさせてくれる。一方、ときおり見かける青いベレー帽の「セントラル・セキュリティ」と呼ばれる部隊も大統領の近親者が司令官をつとめ、要人警護や治安維持活動を担う精鋭部隊であつて、やはりエリートである。しかし、徴兵制度でかり出された通常の兵隊はたいていくたびれたエンジ色のベレー帽を頼りなげに頭の上に載せている。

とはいえ、国家にとって軍隊はなくてはならない組織である。現在のイエメンでは徴兵制がしかれており、原則として十八歳以上の男子は三年間の徴兵（ヒドマと呼ばれる）に従事する。ただし一人っ子（姉妹がいても男子一人の場合も含む）は免除されることがあるし、一九七〇年代の出稼ぎブームのときはお金を払えば兵役は免除されてサウジに働きに行くことができた。また、二人兄弟の場合は二人とも兵役をつとめなければならないが、

三人以上の息子がいる場合は一家から二人だけ出ればよいという。社会主義政権であった旧南イエメンでは女性も兵役についていたが、統一後はこのシステムは廃止されたようである。

また、かつて南北イエメンが分かれていて周期的に国境で小競り合いなどしていた冷戦時代は「秘密警察」の活動も活発で、とくに旧ソ連・東ヨーロッパからの軍事顧問の指導の下に「不審な外国人」や相手方の「スパイ」の探索に熱心だった。もともと北にも南にもソ連の軍事顧問は入っていたので、厳密な意味での東西対立の構図が反映されていたわけではないが、当時日本人の電話の盗聴は北朝鮮の軍人が担当しているという噂もあった。この「秘密警察」は一九九〇年の統一を機に南北ともに解散し、互いに蓄えていた「スパイ」のファイルも同時に廃棄した、とされている。

ベレー帽と

イエメン近代史

そもそもイエメンにおいては国軍の歴史も浅い。したがって、ベレー帽がかぶりモノの仲間に加わったのも比較的最近のことである。一九六二年の共和国革命が発生するまで、旧北イエメンはイスラム教ザイデー派の最高権威であるイマームが支配する王国（ムタワッキル王国）であった。この王国にはイマーム直轄の親衛隊があったものの国軍と呼べるようなものはなく、イマー

ムが紅海沿岸地方、中部イエメンを平定する際には北部イエメンの二大部族勢力であるハーシエド部族連合（七つの部族の連合体）とバキール部族連合（二四の部族の連合体）の部族兵が動員され、活躍した。このため両部族連合は「イマームの両翼」と呼ばれており、その政治的影響力は現在まで続いている。

ヨーロッパで第二次世界大戦が始まった頃、イマームも軍隊の近代化の必要を感じ、自らの親衛隊のなかから数人をイラクへ訓練に送った。その第一期生は一九三六年に派遣されたのだが、六二年の革命で中心的役割を果たした



まだあどけなさの残る徴兵の兵士。半年ごとに任地を移動する場合が多い。後ろの銘板の右側はアラビア語、左側は古代南アラビア語で記されてる。シバ王国の名残である。（マーリブ・ダムにて）

後のサラー大統領もそのなかに含まれていた。同じ頃からイマームは当時のアラブ内先進国であるシリアとエジプトからの軍事顧問を招いたが、この軍事顧問もまた「王制打倒」革命において重要な役割を果たしたのである。すなわち、革命は「ベレー帽集団」の最初の成果であったのだ。

その後旧北イエメンの歴代大統領はカーディー階級の出身である第二代イリヤニ大統領（一九六七—七四年）を除いて、初代サラー（六一—六七年）、三代ハムディ（七四—七七年）、四代ガシュミ（七七—七八年）、そして五代サレハ（七八—九〇年の統一まで）といずれも軍人出身者で占められている。

一方、旧南イエメンはイギリスからの独立当初の初代アツシャアビー（一九六七—一九六九年）、二代ルバイ・アリー（六九—七八年）、三代イスマイル（七八—八〇年）、四代アリー・ナーセル（八〇—八六年）、五代アッタース（八六—九〇年の統一まで）と、いずれも政権政党の「イエメン社会党」ないしはその前身の政党の出身である。アッタース以外は軍人としてのランクも持っているが、それはむしろ政党の身分に付随するものであり軍は社会主義政党に従属的な位置づけに置かれていた。

しばしば、途上国では技術・装備という点のみならず、近代的な思考という意味でも最

も先進的な社会集団は軍である、とされる。軍は近代国家建設のための先頭集団であり、規律や合理を体现する。だからこそ、独立間もない新興国家では国づくりを軍人が指導することが多いのだ。そしてまた政権が行き詰まったとき、軍人によるクーデタが発生する。イエメンの場合も部分的にはこの理屈があてはまる。

しかしながら、命令一下、規律正しく動くなどということほど、イエメン人にとって苦手なことではない。革命記念日や統一記念日のパレードを見れば一目瞭然。兵隊の足が揃わないのである。これは必ずしもイエメン人が「無秩序」な国民だということを意味するのではない。むしろ「権威」や「国家」に服従することがきらいな部族的な考え方の現れとみるべきだろう。

首都から離れた地方の検問では、軍服にマシャッタをかぶっている姿もしばしば目にする。そしてこのほうが違和感がない。大統領などごく一部の幹部は別として、一般の兵隊にとっては、軍人としての規律よりも、部族への帰属意識が優先する。軍の近代化・強化という観点からは嘆かわしいことかもしれないが、国家が独裁者の手によって庶民を支配するよりはましかもしれない。

考えようによれば、これこそまさに国民による軍の支配＝シビリアン・コントロールと



いうものなのかもしれない。